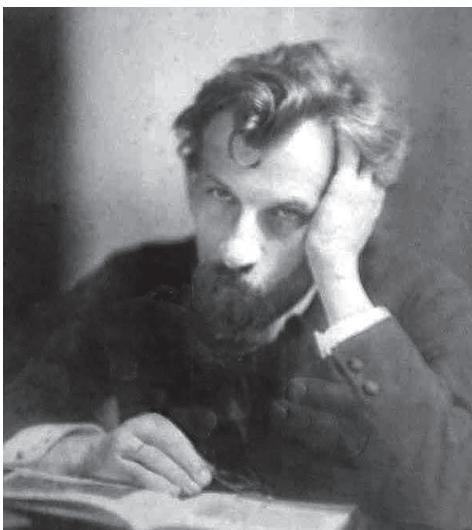


ハンス・プフィツツナーの生涯と作品

長木誠司
(音楽評論家)



2026年1月20日《定期演奏会》において、常任指揮者ヴァイグレの指揮でプフィツツナーのカンタータ〈ドイツ精神について〉を日本初演します。この作品への興味を深めていただくために、今月号から複数回にわたり、プフィツツナーという人物とその作品に迫っていきます。
(読響事務局)

ハンス・プフィツツナー (Hans Pfitzner) は1869年5月5日にモスクワで生まれ、1949年5月22日にザルツブルクで没したドイツの作曲家・音楽理論家・指揮者であった。作曲家としての作品は交響曲・管弦楽曲から室内楽、独奏曲、歌曲、大規模な声楽曲、劇の付随音楽、オペラとあらゆるジャンルにわたり、その作風は同時代のモダニズムを感じさせつつも、19世紀的なロマン主義の芳香を漂わせた典雅な、そして現在から見るといささか退廃的なものとして知られている。同世代の作曲家としては、1864年生まれのリヒャルト・シュトラウス (同じ1949年に没している)、1866年生まれのフェルッチョ・ブゾーニ、そして1874年生まれのシェンベルクなどが挙げられよう。

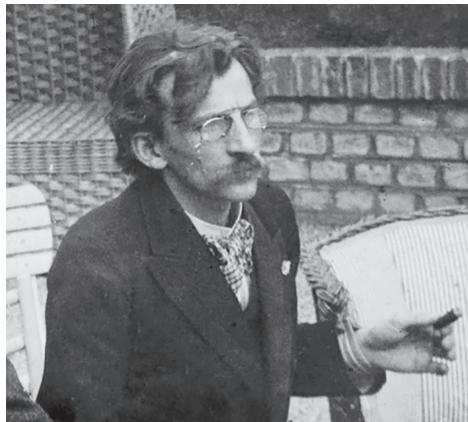
作曲と並行して、芸術・文学・哲学・政治にわたる広範な知見を背景に、全集にして4巻ほどの数の著作を残しており、音楽理論家としての業績も無視できない。こうした創作、理論的な著述、およ

びその信条にしたがって、プフィツツナーは他の作曲家や音楽著述家、ことに同時代の革新的なひとびとに対抗して論陣を張っており、それらはすべて20世紀初頭の音楽史における著名な論争に数えられている。ブゾーニの『新音楽美学草稿』(1907／第2版1916)への反論として著された『未来派の危機』(1917)、音楽評論家パウル・ベッカーの著作に異論を唱えた『音楽的無能の新美学』(1919)、そして、実験心理学的な音楽美学を提唱したユリウス・バーレへの否定的回答としての『音楽的靈感について』(1940)などがその代表であるが、プフィツツナーの主張は、そのまま彼の作曲様式にも反映されていた。

創作と著作を並行させるこうした評論的な活動は、プフィツツナーの信奉するロベルト・シューマンの方法論をモデルにしている。同時に、そこに見られる音楽思想は、敬愛した哲学者ショーペンハウアーなどの影響を受けたもので、ことに音楽と詩作の関係についての考え方は共通のトーンを有している。ショーペンハウアーからの直接的な影響下にある音楽思想と実際の作曲との関係は、音楽史上すでにワーグナーの後期に始まっており、プフィツツナーの代表作であるオペラ〈パレストリーナ〉が初演された1917年の時点ではもう過去のものとなりつつあったが、その意味でも19世紀をひきずっているようなプフィツツナーは今日、「最後のロマン主義者」として位置づけられる。しかしながら、当時彼がドイツ語圏の代表的な「オペラ作曲家」として重要な役割を演じていたことも事実なのである。

プフィツツナーの父親も音楽家で、ライプツィヒ音楽院で学んだヴァイオリン奏者であり、作曲の手ほどきをまずこの父親から学んだ彼は10代で歌曲を残すなど、早熟の才を見せる。正式な音楽教育は、両親の移転先であったフランクフルト・アム・マインのホーホ音楽院で受けたが、その後、1894年にライン川対岸にあるマインツの無給楽長に就任し、これが彼の「指揮者」としての最初のキャリアになる。同年には初期の代表作と言えるオペラ〈哀れなハインリヒ〉が作曲され、翌年初演されている。このオペラの台本は、ホーホ音楽院で知り合ったイギリス人ジェイムズ・グランが、

中世のハルトマン・フォン・アウエによる詩物語に基づいて書いたもので、グランはプフィツツナーの次のオペラ〈愛の花園のバラ〉の台本も手がけている。1901年に初演されたこの第2作も〈哀れなハインリヒ〉同様、中世のゲルマン世界を描いたメルヘンであるが、これらによってプフィツツナーは、ワーグナー以降のロマンティックな「メルヒエン・オペラ」の代表的な作曲家のひとりとなつていく。



1897年にプフィツツナーはベルリンのシュテルン音楽院(現在のベルリン芸術大学)に招かれて教鞭を執るが、1920年には今度はプロイセン芸術アカデミーの作曲マスター・クラスの長に招かれる。ブゾーニも同年にアカデミーのマスター・クラスに招かれており、1924年の彼の死後はシェーンベルクが継いだ。1920年代のベルリンは、

プフィツツナーのような、いわば保守的なロマン主義者も、ブゾーニやシェーンベルクのような先鋭的な作曲家も同時に擁してそのせきりょくい斥力を活かすという、活発な芸術活動の中心になっていく。

1900年代初頭まで、プフィツツナーは数作の室内楽曲、オーケストラ曲などを残しているが、数の上で多いのはなんと言ってもピアノ伴奏歌曲であった。そのなかにはハイネやゲーテの詩による曲もあるものの、ことにロマン派の代表的な詩人、ヨーゼフ・フォン・アイヒendorfの詩に基づくものがもっと多く、その傾向はこのジャンルでの最後の作品となった1930年代の〈3つのソネット〉まで変わらない。この詩人による作品のひとつの頂点と言える作品が、独唱、合唱、オーケストラとオルガンのために1921年に書かれ、翌年にベルリンで初演された「ロマンティック・カンタータ」〈ドイツ精神について〉であろう。

作曲家としてのプフィツツナーのキャリアの上で、最初に注目さ

れるのは、先のオペラ〈愛の花園のバラ〉がウィーン宮廷歌劇場の監督であったグスタフ・マーラーによって認められ、1905年に同劇場の舞台にかかったことである。この頃から、プフィツツナーの指揮者としての活動も広がっていき、1910年に彼はストラスブル(当時はドイツ領のシュトラスブルク)歌劇場の音楽監督に就任している。通常は歌劇場の指揮者を務め、創作はその間に行うという生活はマーラーと同じであろう。

ドイツと、そのロマン主義を熱愛するプフィツツナーは、第一次世界大戦でも国のために働きたくて軍務に志願したが、これは却下された。すでに40代半ばの彼は、戦力として期待されなかつたであろう。だが、その結果として、大戦中の1917年には、彼の作品中もっとも有名なオペラ〈パレストリーナ〉がミュンヘンのプリンツレゲンテン劇場でブルーノ・ワルターの指揮によって初演された。「音楽的伝説」という副題を持つこの作品は、16世紀半ばのトレント公会議で、カトリック教会における音楽のひとつの理想を示したという作曲家パレストリーナの創作上の苦悩や喜びを巡る伝説を描いたもの。〈ニュルンベルクのマイスター・ジンガー〉以降に現れた、芸術家を主人公とするいわゆる「芸術家オペラ」の代表作になっている。これは作家のトマス・マンに深い感銘を与えた作品としても知られており、両者は多くの書簡交換を行うことになった。

マーラーをはじめとするユダヤ人音楽家たちとのつきあいも少なくなかつたプフィツツナーであるが、個人的な信条には反ユダヤ主義があり、それはアドルフ・ヒトラー率いる国民社会主义ドイツ労働者党(いわゆるナチ)の台頭以前から顕著な、かなり強い傾向であった。そのためもあり、また個人的な不幸も重なつて、長寿であったプフィツツナーの後半にはいくつもの暗い影が落ちていく。それに関してはまた次回。

Profile 長木誠司(ちょうぎ せいじ)

1958年福岡生まれ。東京大学文学部美学芸術学科卒業、東京芸術大学大学院音楽研究科修了。博士(音楽学)。東京大学名誉教授。音楽学者・音楽評論家。現代の音楽と17世紀以来のオペラを多方面より研究中。著書に『フェルツ・ブゾーニ・オペラの未来』、『戦後の音楽』、『オペラの20世紀』など。現在〈蝶々夫人〉論を準備中。